

皆様、本日は祖霊大祭おめでとうございます。

誠に畏れ多いことではありますが、私どもは、唯一の神であられる主神の子供です。

祖霊と言われる父母先祖の方々も、主神を親として生まれた子供です。

父母先祖の方々を始め、私ども人類は、地上のいろいろな国や地域に生まれ出てまいりましたが、その前に主神は、あらかじめ天国において、私どもを、大きな愛をもって、ご自身の子たる分霊<sup>わけみたま</sup>として生んでくださいました。

明主様は、「顔形色は変れどおしなべて神の御眼には同じ国人」というお歌をお詠みになりました。

「神の御眼には同じ国人」ということは、私ども人類は、たとえ地上において、顔形や肌の色を始め、自分の所属する国や民族、また、使う言語など、様々な違いがあっても、神様のほうでは、私どもを“今も、「同じ国人」すなわち、ご自身の天国という御国<sup>みくに</sup>に属している子供としてご覧になっている、ということではないでしょうか。

私どもが主神の分霊として天国に属している以上、私どもに授けられている寿命は、この世の寿命だけではありません。

先祖の方々も、私どもも、そして、これから世に生まれてくる子供たちも、永遠の命を、すなわち、天寿という寿命を、あらかじめ魂の親から授けられているのではないのでしょうか。

しかしながら、地上に生まれ出た私どもは、この世の親は知っていても、魂の親を知ることなく生きてまいりました。

自分が主神の子供として、永遠の命という天寿を天国で賜っていたことも忘れておりました。

そうした私どもを、主神は大きな愛によって顧みてくださり、明主様を通して、魂のふるさとである天国を思い出させてくださり、魂の親を思い出させてくださいました。

そして、私どもを赦し、救ってくださり、天国に迎え入れてくださいました。

主神は今、先祖の方々と一体である私どもをご自身の子供として、もう一度新しく生まれさせ、永遠に生きるものとさせてくださろうとしておられます。

私は、このもう一度新しく生まれることが、主神から授けられた永遠の命という天寿を全うすることではないかと思えます。

先祖の方々は、私どもと共に、天寿を全うするために、すなわち、もう一度新しく生まれるために、私どもの中で、主神の命の息を嗣ぎながら、養い育てられている最中なのではないでしょうか。

ですから、先祖の方々は死んでおられるのではなく、私どもの中で生きておられると認め、共に新しく生まれるべく、天国に立ち返らせていただくという、その思いを主神に捧げることが、先祖の方々にとっての何よりの慰霊であり、救いであると思えます。

しかしながら、主神の子として、もう一度生まれるということは、自分だけの力で容易に成し遂げられることではありません。

だからこそ、主神は、地上に明主様を私どもの模範としてお遣わしになり、明主様を天国に立ち返らせ、ご自身の子、すなわちメシアとして、もう一度新たに生まれさせるというみ業を成し遂げてくださったのではないのでしょうか。

そして、その明主様と私どもとがひとつに結ばれていることを教えてくださいましたのではないのでしょうか。

明主様に結ばれた私どもは、元々、主神の子供でありましたが、忘れていた本当の親を思い出させていただいた今、主神に対し、“明主様と共にあるメシアの御名にあって、あなたのみもとに立ち返ってまいりましたので、もう一度、あなたの子供として生まれさせてくださいますように、と、一人ひとり意思表示させていただく務めがあると思えます。

①之光教団の皆様には、自らの意識の中心に主神の光が存在していることを認めるとともに、主神の赦しと救いが自らの心の奥底までも及んでいることに感謝し、すべてを主神の栄光として、明主様を通して主神に帰させていただくというご神業に仕えておられることと思えます。

そうした皆様が、先月の地上天国祭を前にして、明主様のご揮毫になられた「大光明」を①之光教団本部のご神体として奉斎されましたことを、私は誠に慶ばしく思っております。

私どもは、本部や布教所などの各施設、また、それぞれの家庭などで、ご神体を奉斎させていただくことを赦していただいておりますが、それは、明主様が私どもに対し、私どもの心が少しでも主神に向くことを願っておられるからであると思えます。

その主神は、私どもから遠く離れた所におられるのではないかとはいえません。明主

様と共に、私どもの中におられます。そして、すべてのものの中におられます。

私どもの吸っている息は、主神が吐いておられる息であり、私どもが吐いている息は、主神が吸っておられる息であります。

主神によって、私どもは、命と意識と魂を賜り、すべてのものと共に養い育てられております。

私どもは、ご神体に向かって手を合わせることを赦していただき、私どもの中におられる主神に心に向けることを赦していただいていることに心から感謝し、“すべてはあなたによって生まれ、あなたによって養い育てられているものです、と、私どもの中におられる主神と、主神とご一体であられる明主様にご奉告申し上げる必要があると思います。

主神は今、明主様に結ばれた私どもをお使いくださって、全人類とその父母先祖の方々を始め、すべてのものと共にある私どもを、その大きなみ手をもって救い上げ、ご自身の大いなる光のもとに迎え入れるというみ業を成し遂げておられます。

私は、この主神の、すべてのものを天国に迎え入れるという救いのみ業こそ、浄霊のみ業そのものであると思います。

ですから、私どもが浄霊の手をかざすのは、私ども人間が、浄霊対象者である相手に対し手をかざすためだけではなく、自分の中におられる主神が、救いのみ手を自分自身に対して常にかざしてくださっていることを思い出すためであると思います。

夜昼転換した今、すべての人の中心には、主神の大いなる光と、その救いのみ手が存在しております。

私どもが、浄霊という救いのみ業にお仕えさせていただいているのは、自分の中に主神の救いのみ手があることを、多くの方々に先駆けて知るに至ったからではないでしょうか。

浄霊のみ業は、自分を救い、自分に結ばれたすべてのものを救うみ業であります。

浄霊を取り次ぐということは、主神によって赦され、浄められ、救われて、立ち返ってきた多くの方々を、自分自身と共に、自分の中心に存在する主神の大きなみ手の中に収めていただく仲介者としてお仕えするという事です。

私どもが、良くも悪くも、あらゆる境遇や環境に導かれ、また、あらゆる心境に誘われるのは、私どもが元々天国で生まれた「天国人」であり、いつ

いかなる時も、浄霊のみ業、すなわち、明主様と共に、私どもの中に結ばれて立ち返ってきた多くの方々を主神に取り次がせていただくという救いのみ業にお使いいただいているからではないでしょうか。

ですから、私どもが誰かに会ったり、浄霊対象者を目の前に与えていただいたりした時に、“あなた方は、主神の浄霊のみ業によって、赦され、浄められ、救われたものとされているのですよ、共に天国に立ち返らせていただきますしょう、と、自分自身に言い聞かせるようにして告げ知らせ、そして、自分の中心におられる主神に対して、“明主様と共にあるメシアの御名にあって、多くのものと共に天国に立ち返らせていただきますので、あなたのみ手の中に収めてくださいますよう、委ねさせていただきます、このみ恵みがすべてのものに分け与えられますように、という思いをもって、相手の方を自分と共に主神に委ねることが、「浄霊」を取り次ぐということであると思います。

また、私どもが手をかざしている時も、いない時も、主神は常に私どもを浄霊のみ業にお使いくださっているのですから、たとえ気になる方などに実際に手をかざすことが許されない状況であったとしても、今申しましたような思いを捧げることにより、主神は私どもをご自身の浄霊に仕えたものとみなしてくださる、と私は信じております。

そして、私どもの中心におられる明主様が、真の浄霊の取次者なので、日常生活のすべてが浄霊のみ業にお使いいただいていることと受けとめて、どんな時でも、“明主様と共にあるメシアの御名にあってお仕えさせていただきます、という思いを持つことを忘れないようにさせていただきますと思います。

明主様は、「大神の御業といへど人の身を通じて世人救ふにありける」というお歌をお詠みになりました。

先程も申しましたが、主神は今、明主様が「人の身を通じて」とお詠みになっておりますように、私どもの体や心の中のすべてをお使いになって、「世人」すなわち、私どもや先祖の方々を含め、すべての人々を救い出し、ご自身のみ手の中に収めておられます。

私は、このお歌を、明主様の「浄化」のみ教えに当てはめて考える必要があると思います。

私どもは、私どもの身に、病気を始め、いろいろな悩みや苦しみがある時、「浄化」という言葉を使わせていただきますが、浄化をいただいているということは、私どもの心や体を通して、主神がご自身の救いのみ業を進めてお

られるということではないでしょうか。

この主神の救いのみ業こそ、すべてのものをご自身の天国に迎え入れるという、浄霊のみ業なのではないでしょうか。

私は、明主様がみ教えてくださいました「浄化」とは、私ども自身の心と体が浄霊のみ業そのものにお使いいただいていることであると思います。

私どもが浄化をいただいていると感じさせていただいた時には、明主様が私どもに対し、“これも御用なんだよ、少し我慢をしてくれるかい、と仰って励ましてくださり、一生懸命応援して下さっているのですから、浄化をいただいていると感じている本人だけではなく、関わりのあるすべてのものが、先程、浄霊について申し上げましたことと同じ思いを主神に捧げ、そして、私どもが、いかに辛く苦しい中であっても、“この心と体は、多くの人々を救うための御用にお使いいただいているのですね、と信じる事ができれば、明主様も大変お喜びになるのではないのでしょうか。

終わりに、本日の祖霊大祭の佳き日に、私どもは、父母先祖の方々と共に、主神が私どもをご自身の子供として共に天国に住まわせてくださる地上天国という、決して消え去ることのない、永遠の幸福を私どもの中に用意して下さったことに感謝するとともに、地上のすべてを携えて、天国に立ち返って、天国とひとつにならせていただき、すべてを、明主様と共におられる主神の栄光として帰らせていただきたいと思います。

ありがとうございました。

以 上